



理学部II号館の大型機器搬出準備

段階となるからである。下の階が先に搬出されていると、予め上の階の荷物を下に降ろしておくことが可能となるので、それにより、トラックが着き次第、遅滞なく荷積みを進ませることが出来ることになる。

第三に、これは失敗談であるが、「天地無用」とか「下積み無用」という貼紙を余り乱用すると、役に立たなくなるということである。特に、「天地無用」の貼紙は、「天」が上になるように荷物の側面につだけ貼っておけば良いのであって、荷物の上面や下面にも貼ったりすると、運搬中にどちらが上なのか分からなくなってしまうことがある。あげくの果て、クルクル回されてどうにもならなくなってしまうこともあった。また、何でも「下積み無用」で

は、荷物が一段ずつしか積みなくなるので、結局無視されてしまうことになり。通常、ダンボール箱は三段ぐらいは積んでも荷重に耐えられるようなので、本当に「下積み無用」のものだけを選んで貼った方が却って安全に運んでもらえることになるのである。

第四に、荷造りが進むと共に、返納物品が多量に出てくるので、その収納場所を予め考えておく必要があるということである。返納物品の中には、未だ使用可能な物もかなりある。しかも、研究室によつての差が出る。新設講座などで、使えるものは何でも欲しがるとこ



理学部移転第一日、いよいよ出発

ろもあれば、古い研究室などで、荷物が多すぎて適当に処分しなければならぬところもある。理想的には、移転の途中小または移転後に、返納物品を公開して、有効に活用できるようにするとよいのであるが、そのためには、返納物品がある程度余裕をもって配置できるスペースが必要である。残念ながら、理学部ではとてもその余裕はとれなかつた。

以上、私の思い付くままに、いくつか列挙してみたが、最後に今一度繰り返すが、理学部の移転に当たっては、菅原前理学部長を始め、鳥居事務長以下の事務の方々の実に周到な計画と準備、そして運送会社との緊密な連絡による臨機応変の対応に、全く頭が下がる思いをした。

戦いすんで日が暮れて

理学部物理学科 米澤 穰

少なくとも二ヶ月は

研究がストップ

移転は大変な作業である。後の方々への助言のコトバを教室で求めたところ、ゴク少数の方からしか返事がなかった。ツメタイとお思いかも知れないが、もう草臥れて思いだすのも話すのもイヤだ、と言うわけであろう。

実のところ、物理的な意味での「移転作業」はそれほど大した事ではない(と書くと、たちまち反撃を食らって、シロイ目で見られ、今後教室の運営に支障

を来すおそれがあるが)。もちろん学部事務職員の膨大な作業量は別である。教官の中にも非常に忙しいおもいをされた方もいるし、腱鞘炎や腰痛になつたとぼやいている人もいない訳ではない。しかし、少なくとも一週間も寝込まなければならなかった者の数はそれほど多くは無かつたであろう。忙しくて一過性である。(と言う事で事務職員の過重労働をうやむやにははいけません。)

研究者にとって痛いのは、少なくとも二ヶ月程は研究活動をほとんど停止せざるを得なかつたことである。器具、